

[論文]

踏歌神事の伝統色彩文化 — 熱田神宮の特殊神事の装束を通して —

早川 礎子

1. 背景・目的

古来より、陰陽五行説に基づく色彩のもつ象徴性は様々なかたちで色彩と生活を密着させ、色彩文化を作り出していった。

630(舒明2)年に始まった遣唐使は、894(寛平6)年の遣唐使廃止により、唐(中国)との正式な国交が途絶えた。その結果、日本は鎖国状態となり10世紀には唐風模倣から脱し、この時代は色彩文化の面でも日本の四季に鋭敏な自然環境に順応し、四季折々の色彩配色を襲色目と称する日本独自の美意識を取り入れた様々な国風文化が色彩においても確立されていった。その国風文化の中で創造された色彩文化は、それまでの唐風の原色を用いた色彩文化から、日本の気候風土や精神生活に合致した四季の移り変わりにある微妙な中間色を用いた色彩に次第に変化し独自の色彩文化を創造していったといえる。

今日、奈良・平安朝の伝統色彩文化は、神道の祭礼に色濃く継承されている。その伝統色彩文化は、唐風(中国)文化の踏襲に変わり、遣唐使廃止をきっかけとした国風文化の

中で創造された伝統色彩文化であり、日本人独自の感性が最も表れている色彩文化の一つといえる。その伝統色彩には、平安時代に信仰された陰陽五行説を起源とする色彩の象徴性が色濃く継承されている。

今日の近代化された日本社会において、このような伝統色彩文化固有の象徴性が薄れてきている。そして、管見の限りに関する詳細な調査研究は、現在のところ行われておらず、具体的な個別な事例調査をもった記述は見当たらない。

日本の伝統色彩文化に関する研究は、これまでも様々な領域にわたってなされてきている。しかしながら、個々の色彩文化の事例についての詳細な現地調査における研究はなされてこなかった。取り分け、事例研究における神道の祭礼の装束の伝統色彩文化の象徴性は明らかにされてこなかったといえる。

このような理由から、神道における伝統色彩文化の象徴性を明確にすることにより、日本固有の伝統色彩文化の象徴性を再確認することが必要である。これらの諸事実の究明は、古来から継承される伝統色彩文化を継承する日本の神道の祭礼の伝統色彩を記録し、整理する意味において大きな意義を有するである

うし、また、今後、神道の装束の個々の事例研究による日本の伝統色彩文化の研究を確立していくための重要な手掛かりになるであろうと考える。

本稿で調査する熱田神宮は伊勢神宮に次ぐ、由緒ある官幣大社（略して官社）である。熱田神宮は、延喜式名神大社、勅祭社であり、国家鎮護の神宮として扱われている。境内内外には本宮・別宮43社が祀られ、祭典・神事は、年間60余りの恒例と10余度の特殊神事が古来より受け継がれている。

本稿では、熱田神宮の特殊神事における神職の装束の色彩における階層性と、白色について現地調査を通して、伝統色彩の役割について考察するものである。

踏歌神事とは、平安時代に行われていた宮中の年中行事が、何時かに熱田神宮の祭礼に取り入れられたものと伝えられている。踏歌神事は年の始めにあたり春兆す大地を踏んで土地の精霊を鎮め、除厄と招福とを神に祈る意義をもっている。

文献調査及び文献調査及びに現地調査・神職からの聞き取り調査を通して、神道における伝統色彩文化の継承を考察する。

2. 神職の装束の色彩

神職の装束の色彩は、神社本庁で定められた神職の身分・職階の別によって分けられている。以下、装束の色彩を概観してみたい。

2.1 身分・職階・階位

神職には3つの分類がある。それは、「身分」・「職階」・「階位」である。「職階」・「階位」

は、神職になるための基礎資格であり、「身分」は神職になった者に与えられるものである。

まず「身分」とは、神職の経験功績を反映したものである。神社界では階位よりも重視している。上位から、特級・一級・二級上・二級・三級・四級の六等級があり、経歴・人格・神道及び神社に関する功績により、神社本庁の身分選考委員会で決定される。

特級・一級は、原則として浄階、二級上・二級は正階以上を有するものでなければ選考の対象とされない。

次に「職階」は、神社の中での職位のことである。神社の規模と由緒によって様々であるが、一般には宮司・権宮司・禰宜・権禰宜の順である。

宮司は神社を代表する神職である。一社当たり一名である。権宮司は宮司を補佐し、一名とされている。特に許された少数の神社のみに置かれている。熱田神宮では権宮司が在職している。禰宜は宮司の下で祭祀を執り行う神職である。一社に一名とされている。権禰宜は禰宜を補助し、祭祀を執り行う神職であり複数可とされる。

最後に、「階位」とは、神職を務める上で必要な知識・学識の段階を示す。上位から、浄階・明階・正階・権正階・直階の五等階がある。これは神職任用の資格とスライドしている。

宮司及び権宮司代務者は、権正階以上、禰宜及び権禰宜は直階以上の階位を有するものとされる。熱田神宮を含む全国の神社から選定された三百数社の有力神社においては、宮司及び権宮司代務者は正階以上、権禰宜は権正階以上の有資格が定められている。主に身分、職階による階層性に対応して、装束の色

彩が着用されている。

2.2 祭礼の装束の衣服構成

装束とは御装束と称し、一般には殿舎その他の装束に関することをいい、他は祭祀に奉仕する際に身につける服装のことをいう。ここでは、後者の場合を取り上げる。

本稿では、神社本庁規則における祭礼の装束を基準する熱田神宮の装束の色彩について記述していく。神社独自の祭礼である特殊神事を除く、大祭・中祭・小祭における装束の色彩は神社本庁規則によって、ほぼ統一されている。

以下の装束の解説は、熱田神宮の渡邊肇権宮司より提供を受けた神社本庁祭式部講師・故長谷晴男先生の「衣紋道の起源と沿革について」の講義ノート（自筆）に拠っている。これは、神社本庁において行われた全国の神社の神職への講義に使われた個人蔵の自筆による講義録を参照している。

一般に理解されているように、装束は古くは大陸伝来の装束（礼服・朝服等）が用いられていたが、平安時代の遣唐使廃止以後は日本固有の服装に改められていった。具体的には、男子の束帯・衣冠、女子の女房装束（俗称として十二単）と呼ばれる正装の表着・袷・唐衣・裳・袴である。

熱田神宮における、男性神職の衣服形態は平安時代の装束である束帯・衣冠単（衣冠に単を着けた装束）を踏襲している。

陰陽五行説の五色に対応する装束の色彩として次のものがある。

装束には、大祭・中祭・小祭・特殊神事の区別があり、装束も各祭礼で、使い分けられる。大祭には、「正装」である黒・赤・緑（青）

の袍（上衣）の衣冠単、中祭には、「礼装」である純白の袍（上衣）・純白の差袴（下衣）の齋服、小祭には「常装」である白（上衣）の袍の狩衣・白（上衣）の袍・差袴（下衣）の浄衣を着用する。

黒、赤、緑（青）、白は、五色の黒、赤、青（緑）、白に対応している。

2.3 大祭の装束の色彩 （衣冠単の袍・奴袴）

衣冠単では、冠（繁文）・袍・単・奴袴（さしぬぎ）・笏・檜扇・帖紙・浅沓を着ける。底の部分に白平絹を貼る。沓の底に貼った白色の裂地を沓敷（くつじき）といい、古くは身分の高い者が束帯の表袴の紋を沓敷に付けたことに倣い、現行では特級・一級神職が奴袴の紋・藤ノ丸を付けている。

この装束は、大宝令（701年制定）に定める朝服の筒袖に、仕立てられた上衣が日本式広袖に変化したものである。

袍には、縫腋袍（腋を縫う）と闕腋袍（腋を縫わない）との二種ある。色は、大宝令の制で位階により、紫・緋・緑（青）・縹（以上有位者）・黄（無位）に分け、縹以上は各深浅の区別があり、全て九階に定めている。後に、平安中期に改変があったが、一条天皇の頃から一位より四位までが黒、五位が緋、六位以下の有位者が縹となった。現制の装束の色彩は、ほぼこれに準拠したものである。今日の大祭の袍の色彩は、神職の身分により特級・一級が黒袍、二級上・二級が赤袍、三級・四級は緑袍の序列で分かれている。熱田神宮の神職の間では、「緑袍」と呼ばれているが、装束の色の規定では緑となっている。

実際には、今日の緑袍は色相では青色に当たる。祭礼の場合は必ず単を着ける。単は、袍の下に着用する丈の短い裏無しの衣で色彩は、上衣下衣を通じて紅色になっている〔注01〕。

奴袴（さしぬぎ）の色彩は、身分によって分かれており、特級は白固織・文藤の丸、一級は、紫固織・文藤の丸、二級上は紫固織・文藤共緯、二級は紫平絹、三級・四級は浅黄平絹の序列である〔注02〕。前述の通り、特級は白固織文藤の丸裏同色平絹であり、熱田神宮の宮司は、これに当たる。一級は、紫固織文藤の丸裏同色平絹であり、これは藤の丸文が入った紫固織で、文が二級上の奴袴の色彩より白く浮き出ているのが特徴であり、熱田神宮の権宮司は、これに当たる。二級上は、紫固織文藤の丸共緯裏同色平絹である。これは一級の藤の丸文は同じ形であるが、一級の文よりは白く浮き出していない。これは、熱田神宮では禰宜・権禰宜が着ている。二級は、紫平絹・裏同色平絹を着ている。これは文がない紫である。この奴袴を着用するのは、熱田神宮では権禰宜である。三級と四級は、浅黄平絹裏同色平絹である。これを着用するのは、熱田神宮では権禰宜である。身分に対応する奴袴の色彩は、職階と必ずしも対応していない。

2.4 中祭（齋服）の色彩

齋服は、純白の練絹で他の装束の白とは区別されている。

袍（上衣）の裾部分の襷に襷はなく、その他の構成部分は衣冠単の縫腋袍と同様な仕立

てになっている。衣冠単の衣服構成と異なる点は、冠が遠文、袍・単・袴ともに純白で袴が差袴、檜扇を持たないことである〔注03〕。純白が基調色であることが伺われる。

2.5 小祭（狩衣・浄衣）の色彩

小祭・神社に於ける恒例式（遥拝・大祓）には、白衣を下に着用後、狩衣または浄衣を着用する。この装束は烏帽子を被り、笏を持つ〔注04〕。差袴は、齋服に着用され、狩衣は奴袴、浄衣は差袴を着用する。奴袴は、身分による階層機能が色彩・紋様により分かれている。

平安時代初期から、朝廷で狩獵服として採用されたが、中期頃から公家の日常の私服となり、次第に用途が増し、鎌倉以降は公武共に一種の式服とまでに進展したものである。地は後世、綾羅を用いるようになり、殊に色目は年齢又は季節により数種ある。年齢で分かれている色彩は、袖括の紐である。35歳までは朽葉・黄・白・紫・萌黄から、40代は紺・浅黄・白・濃香・白から、50代は白の色彩から選ばれる。平安時代、萌黄色が若者の装束の色彩と用いられていたことから、袖括の紐の色彩の萌黄色はこれに一致している。しかし、袖括の紐の色彩は、この平安朝の色彩の継承していない。袖括の紐は、年齢別に対応しておらず、祭礼によって異なっており、季節によっても異なっている。浄衣は清浄な衣服の意味で、狩衣と同じく小祭・恒例式などに着用する。浄衣の色彩は袍・単・差袴は、純白で色彩による階層機能は見られない。浄衣は白色無文で往昔より、清浄な衣服の一つ

で上皇をはじめ一般に至るまで神事や社参に用いた。地質は白絹で、差袴、立烏帽子、掛緒は紙捻、笏、浅沓をはく [注05]。白色が基調であることが伺われる。

(6) その他の装束 (白張) の色彩

白張 (はくちょう) の袍は白色である。白張とは、布を白粉で固めた狩衣である。袴も白粉で固めた狩衣である [注06]。神職の資格のないものが着用する装束である。

以上の中祭・小祭の装束の色彩の観察の結果から、白色が装束の色彩の基調として用いられていることが分かる。

2. 踏歌神事 (特殊神事) の現地調査

以上見てきたように神道の祭礼には、大祭・中祭・小祭・特殊神事等の区別がある。大祭・中祭・小祭の装束は、全国の神社で共通しているが、各神社が執り行う特殊神事は、各神社固有の色彩文化が継承されている。

熱田神宮の踏歌神事の現地調査は、平成18年1月11日午前11時・午後1時に行った。

踏歌神事は奈良・平安朝の装束を身につけた舞人が、土地の精霊を鎮め除厄と招福を祈る全国的にも、住吉大社 (大阪府大阪市住吉区) と並び大変有名な特殊神事といわれている。高巾子の打ち振る振鼓の音色によって、その年の豊凶が占われるのである。高巾子の振り鳴らす音から、「ペロペロ祭り」とも俗称で呼ばれている。

祭場は、午前には主祭神を祀る本宮と、主祭神とゆかりの深い神を祀る旧政所である末社影向間社、午後には、祭神は本宮と同じ別宮八剣宮と五穀豊穰を始め食物を司る「宇迦之御魂神」を祀る末社大幸田神社で行われる。

祭員は、神社の管理者で神社の運営や祭礼の責任者である宮司、宮司を補佐する権宮司、

権禰宜、歌を歌う詩頭、陪従、笛役、面をつける高巾子役、舞人、小間使いとしての雁使で行われた。

宮司、権宮司、服従権禰宜は白色の袍の狩衣を着用する。狩衣は常装とも呼ばれ通常は小祭に着用されている。詩頭、陪従、笛役、高巾子役は純白の斎服を着用する。

宮司、権宮司は西上北面に、権禰宜は西上南面に列立する。奴袴の色彩は身分によって分かれ、紫平絹の権禰宜が前導し、白固織文藤、紫固織文藤の丸、紫平絹の序列である。この序列は身分・職階に対応している。狩衣は袍の色彩は白色であるが、奴袴によって身分・職階に分かれていることが見られるが、斎服と浄衣に関しては身分・職階に分かれていないことが読み取れる。

祭礼の装束の色彩には白色と純白が区別された色彩として用いられている。斎服の純白とは、白色のよりも生絹であり光沢がある。斎服は通常は礼装と呼ばれ、中祭に着用されている装束である。舞人は小忌衣を着用する。小忌衣は単に紅色が着用されており、白色の袍に藤の花の文様が入り、平安時代の武官の束帯の衣服形態をとっている。いずれも、白色が基調となっていることが分かる。

小祭の装束の浄衣 (白一色の狩衣) は雁使が着用している。神社本庁によれば、この斎服・狩衣の袍・浄衣は、一般に神職の身分・職階の区別なく着用すること規則になっている。 [注07]。白色が基調色になっていることが伺われる。

午前9時10分、詩頭・陪従・笛役・高巾子・舞人・雁使は、斎館において、更衣する。宮司、権宮司、副従権禰宜は狩衣、詩頭・陪従・

笛役・高巾子は純白の齋服を、舞人は小忌衣を着け、巻纓冠をかぶり、太刀を佩く。雁使は、白色の浄衣を着用する。手水の儀をし、齋館前の庭に西上北面に列立する。西の方位は、本宮に向かう方位である。神職からの聞き取り調査によれば、神職の列立、参進、着座における「上」の方位とは、神への方位を示している。祭礼の中で神が常に意識されていることが読み取れる。

午前9時40分、齋館から詩頭・陪従・笛役・高巾子・舞人・雁使の列次で祓所まで参進する。詩頭以下は、祓所において詩頭・陪従・笛役・高巾子・雁使は北上西面に列立する。祓所役は北上東面に、舞人は東上北面に列立する。「上」の方位とは、神への方位を示している。祭礼の中で神が常に意識されていることが読み取れる。

祓所にて修祓を受けた後、陪従・笛役・高巾子は大幸田神社の前に進み笏拍子を打ちつつ次いで鎮皇門跡に参進し、再び、影向間社に至る。この間に、詩頭、舞人は影向間社に至り、陪従以下の参著を待つ。全員が所定の座に着くと、まず雁使が詩頭、舞人に桜の挿頭花を冠にさす。陪従、笛役、高巾子役には山吹の挿頭花を各々の冠にさす。山吹と桜の花は、平安時代において春の襲色目の色名としても取り入れられており、春を象徴していると考えられる。熱田神宮における舞楽においても桜と山吹の花は取り入れられていることが観察できる。熱田神宮宝物館の研究員の解説によれば、桜は稲の神の寄り代とされている。桜を愛でる理由を稲の花と類似しているためであり、春になると稲の神は、天から降って桜の木に宿り、その年の米の出来具合を告げる。このように、踏歌神事は、稲の神

を迎える儀式でもあったといえる。

陪従が「竹川半首」を歌い舞人は「卯杖舞（うづえのまい）」を舞う。影向間社へ正参道より、西参道を経て大前に参進する。詩頭以下は大前石段下の所定の座に着く。

本宮大前の儀は、先ず宮司が祝詞を奏上する。次いで、陪従は「万春楽」を歌い、舞人は、一人ずつ順次大前石段下に進んで一揖を三度する。次いで、陪従は「竹川半首」を歌い、舞人は卯杖舞を舞う。次いで、陪従は「浅花田」を歌い舞人は「扇舞」を歌う。次に、詩頭、高巾子役は大前に進み、詩頭は詔文を読む。高巾子役は、巨大な冠を被り、振鼓を持ち、「カナワサ右」「カナワサ左」の合図により、右、左と振鼓を高く掲げて、数度これを打ち振る。高巾子役の打ち振る振鼓の音色によって、その年の豊凶が占われるのである。陪従は「何そもそも」を歌い、舞人は大前石階下に進み、一揖を三度する。

踏歌神事の中心的な祭礼の場面は、詩頭、高巾子役は本宮大前に進み、詩頭は詔文を読む。これが全体の中心をなしている部分であるといわれる。高巾子役は、巨大な壮年の男面を被り、振鼓を持ち、右、左と振鼓を高く掲げて、数度これを打ち振る。詩頭の読み上げる詔文は、農耕と養蚕の予祝の詞が中心である。高巾子役の打ち振る振鼓の音色によって、その年の豊凶が占われるのである。

次いで宮司以下退出し齋館に入る。入場の参進では、白色の袍の齋服、小忌衣、白の袍の浄衣で列立し、退場する時は小忌衣、純白の袍の齋服、白色の袍の浄衣で参進し列立していたが、宮司、権宮司、権禰宜の祭場からの退場は、齋館前庭に白色の袍の宮司、白色の袍の権宮司は西上北面に、白色の袍の権禰

宜は西上南面に列立し退場する。白色の袍の宮司、白色の袍の権宮司、白色の袍の権禰宜の序列で退出し齋館に入る。小忌衣の白色の袍、純白の齋服、白色の浄衣の序列で退出する。

いずれも、装束の色彩において白色が基調色であることが読み取れる。そして、白色については階層性が見られないことが伺える。

3. 結果

以上の観察の結果、踏歌神事の装束の伝統色彩文化について次のことが分かった。

(1) 踏歌神事の色彩の階層性

踏歌神事の神職の装束には、職階の階層性は観察されない。序列においては、齋服、浄衣、小忌衣は身分・職階による方向性があるが、大祭の装束に見られるように装束の色彩によって神職の身分・職階は分かれていない。

(2) 神道における白色の象徴性

神道における白色とは、黒袍・赤袍・緑（青）袍を位階によって着用する大祭以外の中祭・小祭・特殊神事等では祭礼の基調となる装束の色彩である。

4. 考察 神道における白の象徴性と五行思想

神道における白色とは、黒・赤・緑袍を位階によって着用する大祭以外の中祭・小祭・特殊神事では祭りの中心となる装束の色であると考えられる。

第一に考えられることとして、白色が清浄を象徴しているということである。それは、祭

礼に先立ち行われる潔斎において、白色の装束が着用されていることに示されている。祭礼とは、神と交流し、神と一体になることをめざすものといえる。そのため祭祀にかかわる祭員は、何よりも心身を清浄にし、穢れに触れることを慎まなければならなかった。これを齋戒、潔斎、物忌などといい、祭祀を構成する重要な要素の一つになっている。その時に着用する衣服は、清浄な白色の衣服であるとされる。これは、熱田神宮の大祭・中祭・小祭・特殊神事等において共通している。

熱田神宮の神職への聞き取り調査によれば、神職は「白から始まり白に終わる」とされている。これは、祭りに出る資格のない白の装束の神職から、特級の最高の位の紋付の白の装束への神職の成長の姿といえる。その白とは、神職によれば「あるがままの姿、自然との調和であり、四季折々の花々に溶け込む姿」であるという。この自然に溶け込む色彩こそ、伝統色彩文化として継承されている白の源にある考え方ではないかと考える。

次に白色と五行思想との関係を考察すると、祭礼の装束の色として、神道では黒色・赤色・緑（青）色・白色が用いられている。これらの色彩は、奈良・平安王朝に起源があるとされている。その伝統色彩文化には、五行思想の影響が色濃く継承されていると考えられる。

五行思想とは中国の古代哲学である。日本の飛鳥・奈良時代は、政治・宗教・思想・社会生活のあらゆる面において中国の影響が大きい時代であった。この時期に中国からもたらされたのが、五行思想であった。これらの時代に続く平安時代にも、この影響は残っている。

五行とは、木・火・土・金・水を指し、地上の出来事は自然現象であれ人事であれ、すべてこの5つの要素の作用と循環、すなわち行によって説明される。循環は、木を起点として、木→火→土→金→水と巡り、木に戻る。5つの要素には象徴としての色があてられ、またそれぞれ方角・季節・時刻・徳目などが配当されていた。

五行	木	火	土	金	水
五色	青(緑)	赤	黄	白	黒
五方	東	南	中央	西	北
五時	春	夏	土用	秋	冬

黒・赤・緑(青)は大祭の装束の色とされている。これは、五色の木・火・水の行の色とされている。白は金の色とされている。黄の色の装束は、神道の祭礼では着用されていない。これは五方に関係があるのではないかと思われる。

黄は中央を表している。神道では参進する時、参道の中央を外して歩くことになっている。それは神職への聞き取り調査によれば、中央は「神の通る道」であるからだ。神社の建てられる方角が、東か南向きとされていること、常に東に職階の高い神職が並ぶことは、方角について常に意識されてきたと考えられる。神職の装束が五行思想の影響を受けてきたとすれば黄が中央を示すことから、装束の色彩として外されたと考えられる。

奈良・平安朝は官位の整備と実現に努力が払われた時代であり、その特徴的な表れが位階による公式服としての衣服の色の制定である。公家において位階を服色で表わす規定は厳然と守られてきた。

冠位十二階の制を淵源とする位階相当の色を当色と呼んだが朝廷をはじめとする公の場で当色の袍(位袍)を用いることが規定されてきた。推古11(603)年、聖徳太子は、中国(隋)の冠位制を導入して、冠位十二階を定めた。この制度は、陰陽五行説を基本とし、最高の「徳」には、紫、「仁」には青、「礼」には赤、「信」には黄、「義」には白、「智」には黒が、それぞれ配当され冠位を表す「冠」や「服」の色になった。この色彩も陰陽五行説の五色に対応している。

以上のように日本において継承されている神道の祭礼の中の伝統色彩には、今日、私たちが日常生活において使用している色彩以上の意味が内包されており、その色彩は唐から伝わった五行文化を基本とした神道における、ある象徴的な意味を込められて着用されていると共に、平安朝色彩文化を継承している階層性が観察された。

そして、神職は白色について特別の意識があると考えられる。白は「清浄」の象徴がある。神道の祭礼の観察から、祭礼が四季ごとに明確に分類されていることが分かる。「仲春」の祈年、「季秋」の新嘗祭のように季節と祭礼には、密接な結びつきがある。五行説では、青は春、赤は夏、黄色は土用、白は秋、黒は冬に対応している。黒・赤・青は大祭の装束であり、白は中祭・小祭で着用される装束である。そこには日本の四季が表されていると考えられる。日本には、四季があり、四季の移り変わりを愛でる心は、季節ごとに催される祭りによって、育まれたにちがいない。又、水田稲作農耕における季節と祭りの関係が四季の移り変わりに対して、感性を育んだといえないか。

小林忠雄氏は、陰陽五行説と色彩について、「陰陽五行説との関係を考えて、陰陽は、森羅万象にも置き換えられ、暖かい太陽と水、南の方位を象徴する赤と白に、冷たい太陰（月）と水、北の方位を象徴化する白と黒に相対して表現されるようになった。」[注08]と述べている。このように、色彩が象徴しているものは単なる色彩の色みだけではない。

陰陽五行説は日本において自然崇拜の神道と結びつき、伝統色彩文化として四季を表現しているのではないか。神道では、多くの場合、自然にある海や山、祖先（人間など）を神として崇拜の対象にしている。古代の日本人は、神は祭の時に、木や岩などにやってくると考えていた。また、山そのものが神の体だと考えられていた地域もあったことから考えると、山から水を引くことにより、水の神が崇拜されたと考えられる。神道が自然と強く結びついていることから、装束の中心となる色彩が、陰陽五行説において自然現象と結びついていることは偶然ではないだろう。

注

- 01、熱田神宮文化課：企画展 祭りへの誘い—装束と神宝—、熱田神宮宮庁平成13年2月、p18～19
- 02、熱田神宮文化課：企画展 祭りへの誘い—装束と神宝—、熱田神宮宮庁、平成13年2月、p20～21
- 03、熱田神宮文化課：企画展 祭りへの誘い—装束と神宝—、熱田神宮宮庁、平成13年2月、p20～21、及び八束清貫：神社有職故実、神社本庁、昭和二十六年七月、p109～119を参照している。
- 04、八束清貫：神社有職故実、神社本庁、昭和二十六年七月、p119～120
- 05、熱田神宮文化課：企画展 祭りへの誘い—装束と神宝—、熱田神宮宮庁、平成13年2月、p22～23、及び八束清貫：神社有職故実、神社本庁、昭和二十六年七月、p120～121を参照している。
- 06、熱田神宮文化課：企画展 祭りへの誘い—装束と神宝—、熱田神宮宮庁、平成13年2月、p24～25、及び八束清貫：神社有職故実、神社本庁、昭和二十六年七月、p120～121を参照している。

07、八束清貫：神社有職故実、神社本庁、p121、昭和26年

08、小林忠雄・色彩用語事典：日本色彩学会編・財団法人東京大学出版会、p21、2003.3

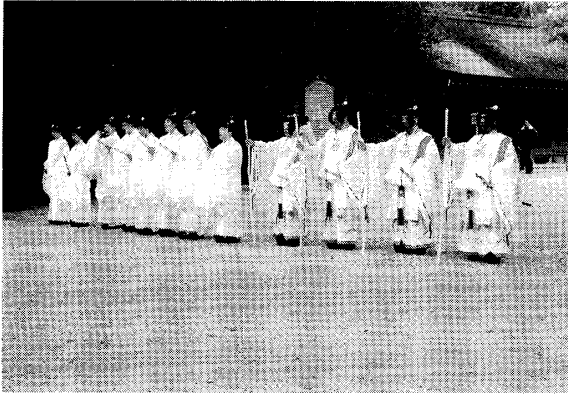


図1 踏歌神事の色彩

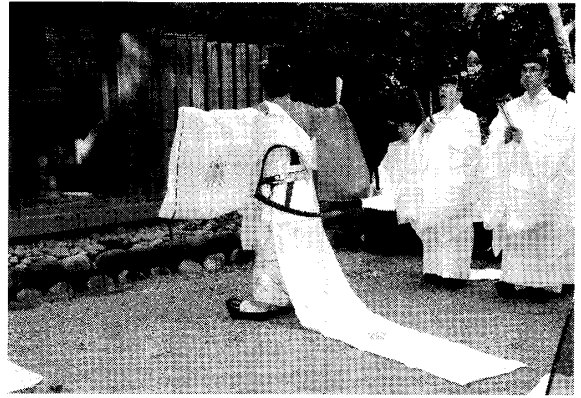


図2 舞人の小忌衣の色彩



図3 斎服と浄衣の白色



図4 狩衣の色彩

Traditional Colors of *Toukashinji*:
A Survey of the Costumes in the Special Festival of *Atsuta* Shrine

Motoko HAYAKAWA

Abstract

This paper takes up the rank and function of the Japanese traditional colors, with the special reference to the color of white.

The results of the survey are follows:

- (1) In the special festival, *shinsyoku* or people in *Shinto*'s divine occupation, wear *hou* which is a coat *hitoe*. This costume is not classified into rank by colors.
- (2) The white costume implies the Japanese spiritual origin of *kami*, which is homonym of both "upward" and "god."